前程から、大きな鷹が、お池の眞上に舞うて居ましたが、鼠の死骸の浮いて居るのを見付けたとみえて、いきなり爪にひっかけて飛び上って行きました。蛙は、やっぱり、足を鼠に結び付けて居ましたから一所に、鷹に取られたといふことです。

人をのろはゞ、穴二つといふ事がある。

（六十一）　馬と獅子

或時、馬が山へ行って獅子と同盟して、澤山に獲物を捕獲する事に約束しました、獅子は、力で、馬は早く駈ける事で、互に助け合って、利益を得ようといふ事に決めました。さて、思ふ存分に、澤山の獣を捕獲しました時に、獅子は夫を甘く分けようではないかと言ひ出して、三塊に分けました其處で、獅子の申しますには、

「己は、獣の王だから、先づ第一の塊を取って置くよ。そして、第二の塊は、お前と一所に働いた分け前として貰って置くよ、夫から、第三の塊だが之は、お前、喜んで己に呉れて置いて、早く家へ歸らないと、お前の爲にならないのだ」

といって、皆取ってしまいました。

力即ち正といふことがありますが、何とかいふ國は、今迄よく此獅子の樣な事をしましたっけ。

戰爭のお話

先月一日の鴨綠江の戰爭は、殆んど前古未曾有の激戰で、敵の死傷は軍團長、師團長の負傷を始め無慮數千人に上った位ですから、我軍に於ても、隨分多數の損害を被ひりました、其中に、まことに運よくも九死一生を得た勇士の面白いお話があ

ります。

●吉富少尉といふ方は、朝早くから、斥候となつて、敵情を偵察し、やがて、本隊に歸ろうとしました所が、敵は向ふ岸から之を見付けて、雨霰の樣に鐵砲をうちかけました。其中、一つの丸は、ビューッと風を切って飛んで來て、少尉の腹の眞中に當らうとしたが、此時、少尉は、呼子の笛を胸に下げて居たので、丸は、其呼子に當つた爲め深く腹を打ち貫かないで、僅擦り傷で濟んだといふ事です。

●又、某師團の一兵が、合戰の眞最中、頭を下げて鐵砲に丸をこめようとして居る所へ、忽ち敵の撃ち出した大砲の丸の彈片が飛んで來て、見事、背負つて居た背嚢に當りましたが、引き續いてバラ〳〵ッバラ〳〵ッと幾つとなく、砲彈を受けて暫くの間に背嚢は丸で、蜂の巣の樣に穴だらけになりましたが、而し其お蔭で、此兵士の身體には少しも、傷を受けなかッたといふ事です。

●之もよく似たお話し、一兵が戰爭中、敵の丸を受けたが、其丸は左の手と胸との間を通って、背嚢の片端をうちぬき、其中に入れて有ったお辨當を打ち破ったけれど身體には少しも傷がつかなかつたといふ事です。

面白い問答

ある處で、商賣人と、船頭とか出遭て、いろ〳〵お話をして居りました序に、次の樣な問答が始まりました。

商人「時に、お前さんのお父さんは、どこでお失くなりました